

「理論と現実の往復運動」

一橋大学
大学院経営管理研究科(商学部)
教授

たなか かずひろ
田中 一弘 氏(高校37期)



1985年 立川高校卒業
1990年 一橋大学商学部卒業
1990年 株式会社 日本興業銀行入行
1999年 一橋大学大学院商学研究科博士後期修了 博士(商学)
1999年 神戸大学大学院経営学研究科 助教授
2003年 一橋大学大学院商学研究科(現・経営管理研究科) 助教授 →教授(至現在)
近著に『先義後利の経営-渋沢栄一が求めた経済士道』(有斐閣)がある

■立高時代

都立高校の入試が学校群制度からグループ合同選抜制度に変わった最初の年度に入学しました。立高が属した第八学区はおおよそ立川以西でしたが、私は高1のとき立川から三鷹に引っ越し、学年で(恐らく)唯一人の中央線利用者でした。誰よりも「都会」に住んでいるはずなのに、タナカズという私の呼び名にいつの間にかやっつけた異名がなぜか「イナカズ」でした……。

吹奏楽部で練習(楽器はコントラバス)に励む日々。合唱コンクールや有志で歌ったり、にわかりコーダーアンサンブルを立ち上げたりと、立高時代の思い出は音楽に彩られています。一方、量子論のことを教えてくれたF君、仏教文化に精通していたS君などなど、多士済々の同級生から知的刺激を受けることも多かったです。そして何より、立高という共同体の一員だという連帯感を強く感じていました。

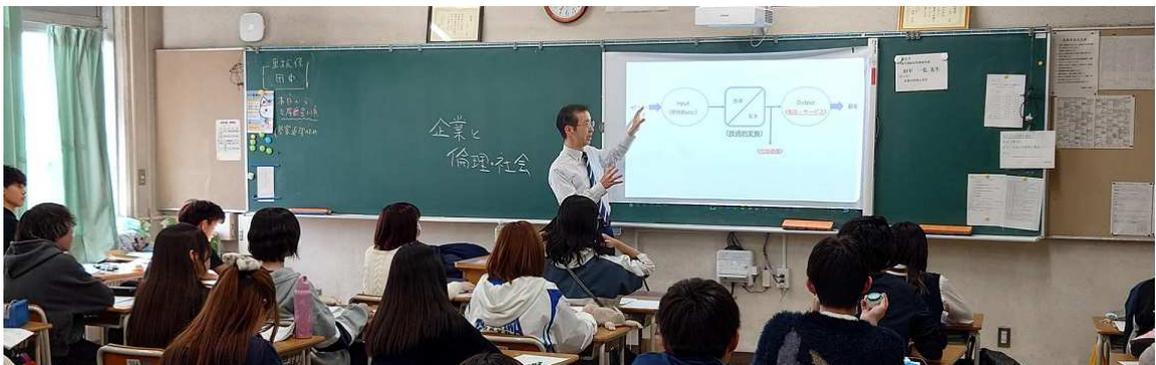
■立高卒業後～現在

一橋大学を卒業して銀行に勤めたあと、学者の道に転じました。母校の大学院で博士号を取得し、すぐに神戸大学に奉職しました。生まれて初めての関西生活は新鮮な発見の連続でした。そのとき築いた人的ネットワークのお陰で、今でも関西に出張する仕事が多いです。

2003年4月に一橋に戻って来てからは、職住近接の環境(徒歩通勤)で、教育・研究(と学内行政)にどっぷり漬かってきました。現在、高校を卒業して間もない学部生から、仕事をもつ社会人らが対象の大学院MBAコース、さらには大企業の役員クラス向けのシニア・エグゼクティブ・プログラムまで、多様な年齢層の優秀な人たちに教えています。2024年11月には立高で出張講義もしました。

専門は経営学です。中でも経営哲学と企業統治(コーポレート・ガバナンス)の問題に取り組んでいます。具体的には「義(道徳)と利(経済)の両立をいかに実現するか」「企業は誰のものか」「責任ある経営に必要な企業統治とは」といったことがテーマです。その一環で渋沢栄一、稲盛和夫など「よき企業者」の思想も探究しています。

経営学は社会科学の中でもとりわけ現実に近い学問です。だからといって、現実をなぞるだけのハウツーの“経営学”では何のための学問だかわかりません。「理論と現実の往復運動」-これは一橋大学商学部の教育・研究の基本理念で、私自身、それを旨としてきました。経営に関わる「現実」を深く見極めて、その本質を抽出する、あるいは背後のメカニズムを解明するような「理論」を提示し、それを引っ提げて経営の「現実」に当たり、そこから「理論」をブラッシュアップしていく。「理論など現実の経営には役に立たない」と言われることがあります。むしろ「良い理論ほど現実に役立つものはない」(神戸大学でお世話になった経営学の泰斗の言葉)のです。単に「企業や産業が発展するため」に役立つだけではなく、「企業に関わる人々、ひいては社会のみんなが物心両面で幸せに生きるため」にも役立つものでなければなりません。



立高出張講義 (2024年11月)

■立高生へのメッセージ

昨年の立高出張講義で、経営者の責任としての「先義後利(義を先にして利を後にす)」ということに触れました。これはもちろん経営者だけではなく、誰にとっても規範とするものです。「利を後に」とは利を捨てろという意味ではありません。利も大事だけれど、それより義をいっそう大事にしようというのです。立高での日々の生活でも意識してみてもいいでしょうか。自分の進路を考えるときにも、でも、そのためには自分にとっての「義」とは何かが問題になるはず。人の命を救うことなのか、何かしらの社会的な課題を解決することなのか……。それを見つけるために友人たちと議論してみるのもいいでしょう。立高には今もそのための豊かな土壌があることを、出張講義のときに私は感じました。

商学部や経済学部、法学部、社会学部、ソーシャル・データサイエンス学部に興味のある立高生が一人でも多く一橋に入学してきてくれることを待ち望んでいます—立高から自転車ですれすれ15分ほどの国立キャンパスにて。